

地域文化財の保存と活用*

「産業技術史資料の保存と活用に関する基礎的研究」(報告)

西川 幸治**

1. 「地域文化財」とは

一般に、文化財は国や地方自治体が指定する「指定文化財」に限られていると思われがちである。しかし、「指定文化財」でなくてもその地域にとってかけがえのない貴重な文化財がある。たとえその文化財が審議会の学識経験者らによっては指定に値しないと思われたとしても、野の石仏や町かどにたつ地蔵堂などは親から子、子から孫へと受けつがれ、現在に生きる人びとをかたく結びつける地域にとってはかけがえのない文化財である。鎮守の森や寺院の庭、町や村の辻にたつ祠や野の石仏、春や秋の祭り、盆や正月などの年中行事も含め、地域の生活を魅力あり、活力あるものとしているいっさいを「地域文化財」と呼ぶべきだとかんがえ、地域に根ざし、地域の生活を活性化する役わりをはたすのが「地域文化財」だとしたのである。

人びとの移動が制限されていた近代以前の閉ざされた社会では、地域の生活を楽しくし生き生きとさせるために、各地でさまざまな知恵を働かせてきた。ところが、近代とりわけ、戦後の開発や再開発のなかで、伝統的な「地域文化財」を無視し、破壊する傾向がよくなった。しかし、近年になってこの傾向

への反省や反発があらわれ、各地で町なみや遺跡の保存につよい関心が深まりつつある。

「地域文化財」をいま一度見なおし変貌する地域の生活の中にかかしているこうという動きが出てきているのである。

地域文化財の動態保存

「地域文化財」について具体的に検討するきっかけとなったのは、京都府と京都市の文化財指定条例の制定の作業に関わったときである。実は京都府・市は文化財条例がもっとも遅く制定された自治体であった。国指定文化財が非常に多いこともあって京都での文化財指定条例の制定がおくれたのである。自治体の条例をあえて持つ必要もないという雰囲気だったのであろう。その京都で、あらためて条例を作るのならば、当面する現状に適した対策をもちこむべきだということになって、「地域文化財」の概念をとりいれ、登録制や文化財環境保存地区という新しい制度が京都の文化財条例ではとりいれられたのである。

まず、「地域文化財」を「指定文化財」と比較してかんがえてみたい(表-1)。指定文化財の場合には、指定を受けるときびしい規制が加わえられ、修理などに際して補助金が交付され、建造物の修理にあたっては創建当

* 1990年10月15日受理、博物館構想、地域文化財、資料保存、資料活用

** 京都大学工学部

表一 1 指定文化財と地域文化財

指定文化財	指 定	規 制	補 助 金	静 態 保 存
地域文化財	登 録	顕 彰・啓 発	表 彰	動 態 保 存

時の形に復原される場合が多い。法隆寺や薬師寺の例でもわかるように、後世の改造を取り除いて、あくまでも創建当時の姿にもどすという形をとっているのである。文化財をある時代に固定し、変化をまったく認めないという立場に立ち、「静態保存」と呼ぶことができる。この静態保存の手法が、もし民家や町なみに適用されるならば人びとの間に保存アレルギーともいうべき反撥をひきおこす原因となる。町なみや住居には静態保存の手法は適用しにくいのである。それを地域文化財として独自の保存の手法をかんがえようというのである。

「地域文化財」の場合には、指定にかわって登録し確固とした目録（インベントリー）を作成し、「地域文化財」を変化させたり・変更を要する際には、自治体に通知し、協議しその指導を受けなければならない。指定文化財規制にたいし、文化遺産としての価値と重要性をさまざまな媒体メディアを通して啓発し顕彰し、補助金の代りには表彰といった手段が取られる。また、保存の手法として「指定文化財」の「静態保存」にたいして「動態保存」という概念をとることにしたい。

たとえば、京都の町なみは古いとはいっても平安時代の痕跡はほとんどない。長い年月をへて、生活の安定と向上をねがって工夫し改造をかさねてきた結果、今の京都の各地の町なみがうまれたのである。したがって、町なみはこれからも変化しつづけるであろうし、町なみの伝統を正しくうけつぐことによって変化し、新しい時代にふさわしいすぐれた町なみが生まれてくるとかんがえるのである。伝統を正しくうけつぎ、新しい時代にふさわしく変化させようというのが動態保存の

立場である。動態保存によって、地域文化財を地域に根づかせながら、変化の激しい時代に伝統を損なうことなく次の時代にうけつぐことができる。調査と再評価を繰り返しながら、うけつぐべき伝統をつたえていく保存修景計画を推進するために、動態保存の具体的な手法を開拓すべきだとかんがえる。その一例として近江八幡の「かわら博物館構想」と、「ガンダーラ地域博物館構想」についてみてみよう。

かわら博物館構想

近江八幡は天正13年（1585）豊臣秀次によって建設された城下町であり、天下人秀吉の養嗣子の居城として、いわば副首都ともいうべき位置を占めていた。ところが、秀吉の実子・秀頼の誕生によって、秀次の運命は大きく変わり、やがて高野山で自害に追いやられた。この政変は近江八幡の歴史を変更させずにはおこななかった。やがて城下町の機能を失なった近江八幡は町人の町となって近世を生きていくことになった。苦難の克服のなかで、この町には市民的気風がつつかわれた。その気風をものがたる文政年間の御朱印騒動がある。この町は家康の御朱印状を持っていて、伝馬役を免れてきたが、文政年間になって代官がその御朱印状を見せよとせまってきた。家康からもらった御朱印状に万一のことがあってはいけないと、その写しを見せる。役人はもし事故があったら自分の首を出すから本物を見せよという。それでも町人は「貴様らの首級五つ六つ得たればとて、御朱印にはかえられぬ」と拒否し役人との間に緊張は高まり、町人は集会をくり返し、代表をえらび直訴することになった。薬屋の野田増兵衛が命

を賭けての直訴の代表に選ばれた。死罪を覚悟しなければならぬ直訴の役に選ばれたことを町人・野田増兵衛は「野田家の名声」にもなるとかんがえ、ほこりとしたとつたえられている(御朱印騒動)。「侍は利得を捨てて名をもとめ、町人は名を捨てて利得をとり金銀をため」(山崎与次兵衛寿の門松)と近松はいったが、名誉観念をうばわれた町人が、いまその強い市民的自覚のもとに名誉を回復し自覚したのである。

こうした自治的な町の気風をうけつぎ、近江八幡では今も注目すべき町づくりを進めている。戦後になって、八幡堀をつぶして駐車場にするという話が持ち上がった。八幡堀は城郭と城下町を画して築かれ、城下町から町人の町に転換すると琵琶湖と結ぶ運河の役割をはたした歴史の運河であり、この運河を保全し、町なみを守ろうという運動がおこったのである。八幡堀をよみがえらせ、近江商人の町家の町なみを保存する動きが、市民の協力のもとに懸命にすすめられている。

ところで、この八幡堀に面して、近年まで瓦屋が集まった地区があった。かつて、八幡堀に流れこむ下水道で適度に栄養化した泥をさらえて田んぼにいれ、田の粘土をとって瓦をやく自然のサイクルのなかでという生業をつづけ、地場産業を形づくっていたのである。

近江八幡からは少し離れて、湖東の八日市に瓦屋寺がある。四天王寺を建立するとき、ここで瓦をやいたという言い伝えがある。近江は大陸から先進文化をいち早くとりいれた土地であった。当時、大陸の先進技術によって堀立柱に茅葺という日本の伝統建築が礎石をおき瓦葺をふくという大陸風の建築への技術革新がすすめられたのである。この過程で瓦の製作がはかられたのであろう。

たしかに、日本の古い寺院建築は丸瓦と平瓦を交互にふく大陸からもたらされた本瓦葺であった。本瓦葺は大へん重かったので、庶民の住居にまで普及することは困難であっ

た。近世になって、江戸、京、大坂の三都をはじめ各地の町は火災になやまされていた。防火のために江戸時代の中頃になると棧瓦葺という簡略葺が爆発的に全国にひろがった。この棧瓦葺は大津の三井寺の門前で考案されたといわれている。1826年、ドイツの医師で博物学者であったシーボルトは瓦が日本の景観を規定していると見ていたようで、大津の瓦作りにはシーボルトによる詳しい記述をのこしている。1826年に江戸からの帰路シーボルトは大津で瓦屋を見て、七二の並びという瓦の作り方の話を聞いている。いま、八幡ではガスかまで瓦をやいている。その工房で七二の並びについてたずねたところ、粘土をつみ重ね、一坪を8×9の72枚に針金できり、それを薄片にきりとるのだと教えてくれた。シーボルトは、ドイツでは鉄製の杵を使って瓦を作るので男一人が一日に600から1000枚くらいの瓦をつくることができるとはなしたところ、従来のやり方では一日に100枚も作れなかった大津の瓦屋は、これを聞いて自分も鉄の杵組みを作ってみようといったと記している。当時の技術者も技術の向上につよい関心をもっていたのである。

近年、八幡堀ぞいの瓦工場は湖畔の岡山の麓に移転した。ガスかまで、七二の並びの瓦を1300枚、一挙にやきあげているという。生産の効率をいっそうあげるために集団で移転したのである。そこで、瓦屋の跡を博物館として残そうという計画が「かわら博物館構想」である。それは瓦を対象とした生業技術史的な博物館であり、本瓦葺を輸入した日本で棧瓦葺を発明して改良し、その普及に貢献した過程が展示されることになる。近江八幡や日本の瓦に展示を限定するのではなく外国の瓦との比較もできれば興味深い。さらに、瓦は歴史時代に入ってから考古学の時代判定をする資料としてその文様や様式が使われており、文様・様式の考古資料館としての意味ももつ。近江八幡の町なみは瓦葺の町家の

町なみが、おちついた特色ある町なみを形づくっている。町なみを構成する瓦を展示して、日本の各地、世界の各地の瓦と町なみを比較してみるのも興味深い。

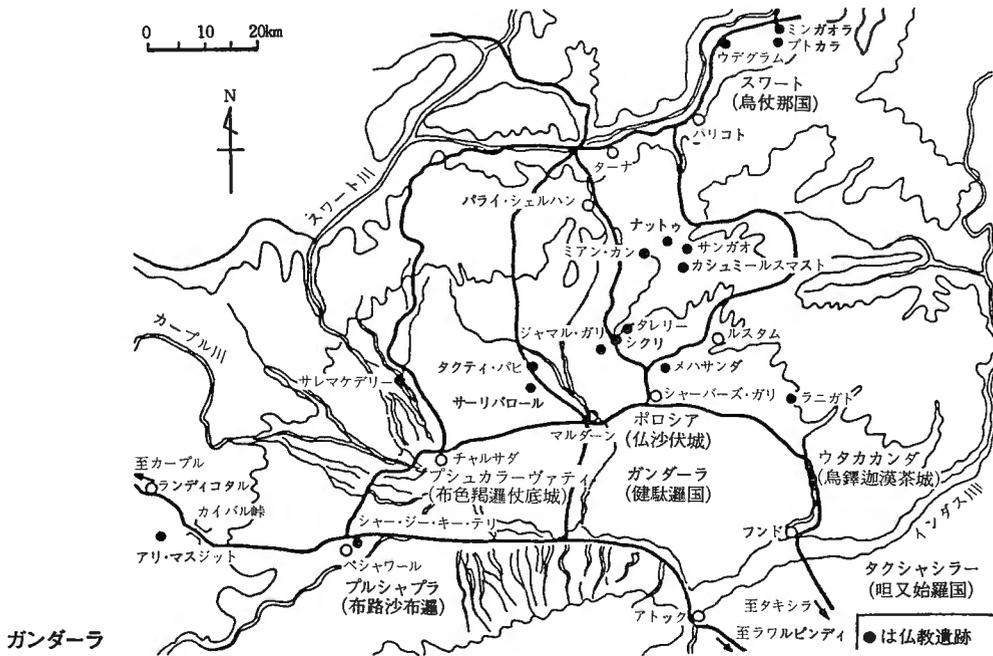
ガンダーラ地域博物館構想

1959年京大がパキスタンとアフガニスタンの調査を開始してから、もう30年になる。この調査に参加するなかでの遺跡が乱掘りによって荒廃し、悪化の現状がこのまま進行すれば、21世紀をまつことなく、東西文化の交流の跡を実感をもって追体験できる場を永遠に失ってしまうのではないかと危惧される。この荒廃と破壊の現状からガンダーラの遺跡を救済し、積極的に地域の開発に役立てようというのが、このガンダーラ地域博物館の構想である。

「地域博物館」というかんがえは、イラクのパピロン遺跡の保存について提案した「バ

ビロン博物館都市」のなかでうまれた。当時、石炭や石油コンビナートが産業都市をつくることのできるのならば、文化遺跡を中心とした博物館都市もまた構想できるはずだとかんがえたのである。技術革新の激しい現在、石炭や石油を中心とした産業都市は減びるのも早い、バビロンの遺跡ならば博物館都市としてそこを調査、保存し、あるいは観光に訪れる人のための施設をそなえ、はるかに恒久的な都市として機能するにちがいないとかんがえて提案したのである。このかんがえ方を発展させたのが「博物館地域」であり、その中核となる「地域博物館」を設けようという構想である。この構想によって、ガンダーラ遺跡の救済と活用をはかりよう意図しているのである。広い地域にわたる多数のガンダーラ遺跡を地域の開発に生かしていくために、博物館地域を設定しようとしているのである。

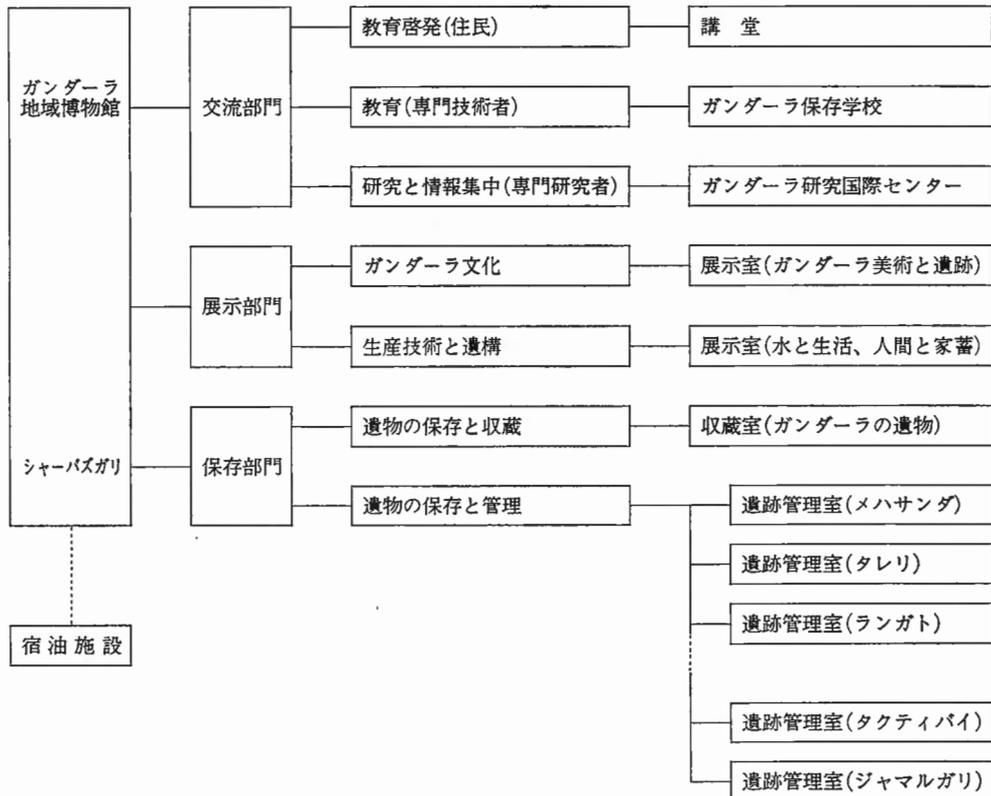
図-1 ガンダーラ周辺図



ガンダーラは東西文化の合流点として、東からの仏教という新しい世界性をもつ宗教と西からのギリシア・ローマ・ペルシアという巨大な人物像を作る文化の伝統が交流して生まれた独自の文化をうみだしたのである。したがって、ガンダーラは東の人にも西の人にもひとしく、つよい関心が持たれてきた。しかし、今、残念なことにこの東西のつよい関心が逆にマイナスに作用している。非常に不幸なことに、組織的な調査ではなく、乱掘によって遺跡の荒廃を進める原因となっているのである。こういった状況のもとで、やがてガンダーラではその彫刻の断片も出てこなくなるだろうとさえ言われている。東西文化交流によって生まれた文化遺産が破壊され、このガンダーラ文化をうみだした風土環境が破壊されるという危機に当面しているのである(図-1)。

浜田耕作は『通論考古学』で遺物の価値を等級にわけて分類している。第1等は組織的に調査され、発掘の地点と遺物の関係が明らかにされているもの、第2等は発掘場所はわかるが、出土した状況がわからないもの、第3等は発掘場所が不明だが遺物が本物であることはわかっているもの、そして、等外として本物か偽物かもわからないもの、という分類がなされている。ガンダーラ遺跡の荒廃はこの等外の遺物、研究上の確固とした資料となりえない遺物を多数うみだしているのである。私たちの仕事は、この4等の遺物がふえるのを防ぎ、遺跡の組織的調査を進め、すでに荒廃した遺跡を一つでも上のランクにあげていく作業をすすめたいとかがえている。そのためにもガンダーラ全域を博物館地域にして、そのセンターとしてのガンダーラ地域博物館をつくろうという構想を私たちは提案

表-2 ガンダーラ地域博物館構想



している。この地域博物館は、交流部門、展示部門、保存部門を考えている(表-2)。

まず交流部門では、ガンダーラの文化遺産を保存するために、その意義と価値を住民や観光客に十分理解させる必要がある。そのために、教育啓発の施設が必要である。さらには、保存のための技術者を養成する施設を設け、いま、乱掘をすすめている村人たちを、研修によって保存の先兵にきりかえたい。保存のための教育と養成をガンダーラ保存学校で行おうというのである。さらに、東西の研究者、たとえばインドの学者はインドで生まれた仏教が西へ向うなかでどのように変化したかに興味をもっているし、イタリアやフランスなど西方の学者はヘレニズム文化がどのように東に影響を及ぼしていたかに関心がある。東方の私たちは仏教文化の源流につよい関心を持っている。こういった東西のそれぞれ異なった視点をもつ人びとがその研究成果を交流させる場として、ガンダーラ研究国際センターを構想しているのである。

次に、展示部門では単に仏教の遺跡としてではなくガンダーラ文化を生み出した村落や都市にまで拡大し、その遺物と遺跡の関連を示す展示をしなければならぬ。ガンダーラ文化をうみだした背景ともいべき生業技術や遺構が展示されることになる。例えば、灌漑や砂糖作りなどの生業に動力として牛力を利用した施設が多くみられた。近年、これらの生業施設が捨て去られている。これらの生業体系を、博物館の庭に井戸を掘ったり、黒砂糖の工房をつくるなどして動態展示することにした。保存部門はこの地域博物館の重要な機能をはたすべき部門で、遺跡の保存管理・遺物の収納・管理について、ガンダーラ地域全体のネットワークを形づくり、その中枢的機能をはたさせる。

かつて、東西文化の交流によってガンダーラ文化を生みだした風土環境のもとで、その遺跡を訪れ、遺物にふれられる場を用意した

いというのが、この構想の意図である。荒廃と消失の危機にたつ遺跡を救済し保存整備の工作を施し、遺物の収蔵保管と展示の工作によって、ガンダーラの地で、過去に生きた先人たちの人間的英知と努力を追想し、追体験できる場を確保し、その調査と保存の作業のなかで、また、見学と観光を通じて国際的協力による新たな東西文化の交流をうみだしたいとかがえている。

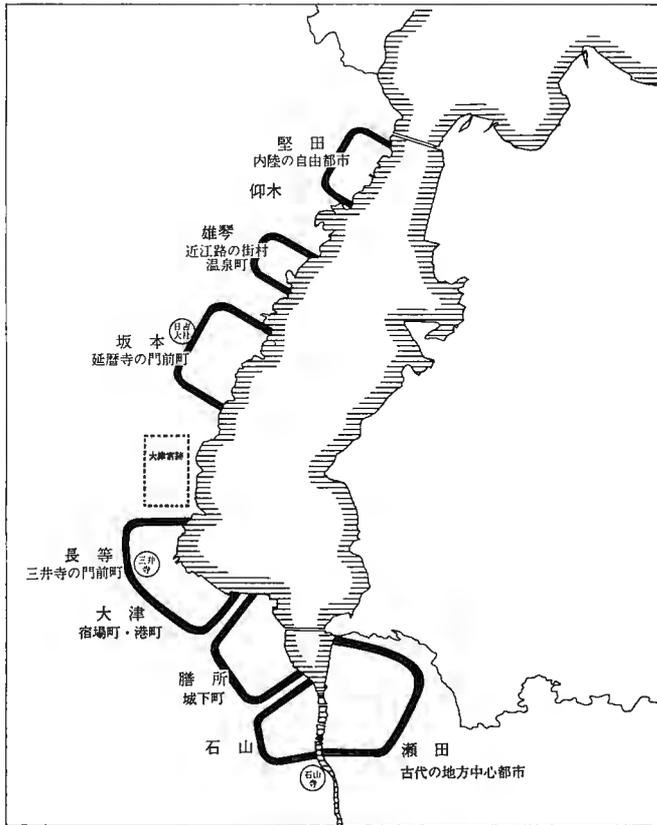
2. 「連合都市」構想

現在、すべてが東京へと一極集中するといふはげしい現象のなかで、地方の都市はその自信を失ない、東京にみられる再開発の動きをまね、そのマイナスの面だけを拡大する傾向がつよい。しかし、世界の金融中心としてつよい地位を占めた東京のような町づくりはどここの町でもできるわけではない。巨大都市東京や大阪をまねた町づくりではなく、地域の人びとが自信をもてる個性的な町づくりをすすめるべきではない。人びとが自信をもって生きることができるといふ町づくりをすすめるために、各地で地域文化財をいかした新しい町づくりをめざさなければならない。

ところで、現在、地方都市は町村合併によってその市域は拡大している。そこで、どの都市でも各地域の地域文化財をいかした町づくりを検討する必要があるのではないか。その例として大津をとりあげてみよう。

滋賀県の県庁所在地・大津では、京都、大阪に近接しその独自の町づくりの必要をせまられている。大津はそれぞれにすぐれた伝統を持ったいくつもの地域からなりたっている(図-2)。堅田は、堺が外洋に開かれた自由都市であったのに対し、中世において堅田衆の活躍がめざましい内陸の自由都市であり、坂本は延暦寺の門前町として発達し、物資の集散地として中世末から近世にかけて大きな位置を持つてくる。その南には大津京の跡もでてくるはずである。港町の大津、城下

図-2 大津連合都市構想



町の膳所、石山、瀬田にもそれぞれの地域にそれぞれの顔ともいべき文化財にめぐまれている。それぞれの地域の個性をいかし、大津市につなげていく発想で、連合都市・大津 (United Towns of OHTSU) とよぶべき町づくりの方向に持っていくべきだろう。

京都も多様な地域からなりたっている。それぞれの地域には個有の地域文化財があり、その地域性を生かした町づくりをする必要がある。

たしかに、京都は単一な町なみで構成されているわけではない。京都はさまざまな地域からなり、それぞれその地域を特徴づける文化と伝統をもち、それを示す文化遺産を中心に個性ある町なみを形づくってきた。現在の

京都にみる町なみの多くは、近世の京都に形づくられた町なみの上になりたっている。近世の京都は御所と二条城を二つの象徴的な核として構成されていた。御所は天皇のもつ伝統的権威をほこり、二条城は江戸幕代を通じて將軍上洛のさいの宿館の役割りをはたし、幕府の現実的権力を示していた。御所を中心に公家の家なみがならぶ公家町を形づくっていたが、明治維新による東京遷都によって多くの公家貴族は東京へ移住し、現在公家町の一帯は御苑として公園化され、わずかに冷泉家が藤原定家以来の文書や記録をつたえ、その面影をよくのこしている。いっぽう、二条城のまわりには北に所司代屋敷がおかれ、南と西に奉行所がおかれ武家町を形づくってい

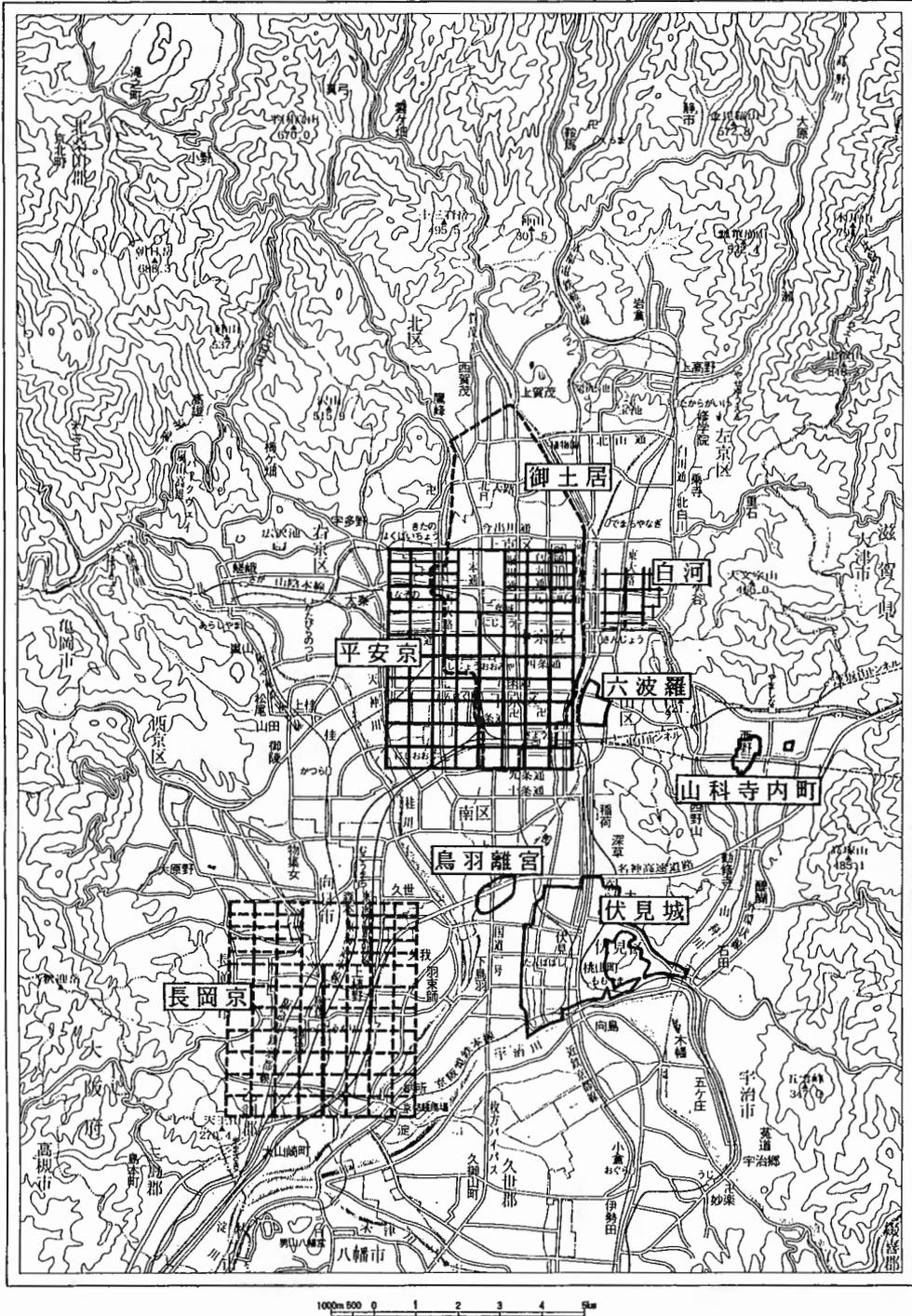
たが、今は二条城をのこすだけで武家町の面影はほとんどみられない。また、市内に点在していた各藩の京屋敷なども、近代になると小学校などの施設の用地となり、その痕跡さえみられない。

御所と二条城にならんで、洛中と洛外の山麓に宏壮な伽藍がいとなまれ、広い神社の森が形づくられた。本山には信者が参詣に訪れ、その門前に門前町がうまれた。東・西本願寺の門前には寺内町がおかれ、今もその構成をよくのこし、地方の門徒たちが泊る宿屋に中世末の寺内町がしのばれる。知恩院、大徳寺、妙心寺などの門前にはそれぞれ特色ある門前町がうまれた。神社の門前にも、社家町の町なみがあらわれた。下鴨や吉田ではわずかにその面影をのこしているが、上賀茂には社家町のたたずまいをよくとどめている。この賀茂では、鎌倉時代の中ごろ、「惣中」を形づくり、人びとは「惣中寄合」によって意志を決定し、強い自治の結合をほこっていたという。文明8年(1476)10月13日の「置文案」をみると、氏人惣中の若殿^{かまへ}原たち130人が1間づつ分担して堀をほり、構を築くことを決議している。堀も構も、町や村を自衛するための防御施設である。上賀茂のしずかな社家町の町なみにも、中世末の自衛と自治の伝統がこめられていることを忘れてはならない。こうした動きは上賀茂にかぎらなかつた。たとえば、文明年間、鴨東の田中では、いま東大路から東へ御蔭通りへ曲ったところにたつ鎮守の森・田中神社を中心に田中構が築かれていた。また、東山をこえた山科では、天文年間に本願寺を核とした寺内町が建設されている。御本寺・内寺内・外寺内の3郭からなる山科寺内町は再建された本願寺教団の中央都市として、地方の門徒たちが参詣する場となり、乱世に理想の世界・「仏法領」を構築しようとするつよい意志を示し、「莊嚴ただ仏国の如し」といわれるまでに繁栄していたという。応仁・文明の乱で荒廢し

た京都の惨状を眼にした貴族には山科寺内町の豊かな都市生活の展開は「その在家、洛中と異ならず、居住する者おのおの富貴、家々のたしなみは美麗」と注目されたのである。今、山科の盆地にのこる土居と堀は環濠城塞化されていた寺内町の遺構であり、中世都市の形態をよく示すものとして注目すべきである。当時、中世末期の動乱のなかで、洛中と洛外をとわず、京都をめぐる町でも村でも構を築き、堀をめぐるして防衛の態勢をとり、内には自治的結合、外には外敵にたいして自衛する町づくりがすすめられていたのである(図-3)。

京都の町家の町なみは、その生業によって西陣や清水のように伝統産業の団地をつくり、また、織物の室町、家具の夷川、薪炭の西木屋町などの同業者町を形づくっていた。近世の町人たちは、きびしい身分的制約をうけ、住居についても儉約令や家作制限で束縛されていた。しかし、しだいに経済的実力をたくわえた町人はこれらの制約をのりこえ、生活環境の向上をねがい町大工と協力してうみだしたのが独自の都市住居・町家であり、その町なみであった。武士の住居が書院造で接客と対面を重視した格式的構成を特色としているのにたいし、町家は都市の細分された土地を有効に利用するためにうみだされた住居であり機能的構成を特色としている。武士の住居が長屋や塀でかこまれ、門を構え、それぞれが独立した形でならんでいたのにたいし、町家の町なみは軒なみに連続し、調和のある町なみを形づくっていた。近世京都の町人は中世末の動乱のなかで町衆たちが示した自治と自衛の伝統をうけつぎ発展させた。その自治組織である町組の伝統の上に、各町が「町の定書」をつくり、町の自治的運営をはかるなかで、町家のデザインについても細かな自主的規制をさだめている。障子作り、長のれん、見せ欄、格子、や路次・裏借屋などについてとりきめ、「町なみよきよう」とはか

図-3 京都近郊図



っている。町人たちは私的な町家に工夫をこらすとともに公的な生活空間である町なみについても、積極的に知恵をはたらかせ、すぐれた町なみ景観をうみだすために努力していたのである。

近代になっても、すぐれた町なみを形づくる努力はつづけられた。近世を通じて、東海道の起点として発展してきた三条通は、近代になって文明開化をいちやくとりいれ、近代化をめざしての施設や建築があらわれた。わが国最初の近代図書館といわれる集書院が現在の中京郵便局の地にたてられたのもその一例である。やがて、集書院にかわって京都郵便局が設置され、日本銀行京都支店が辰野金吾の手によって設計され、いま京都文化博物館別館として活用されている。その後、三条通りは目抜き通りとして役割りは他にゆずったが、独得な歴史をきざんだ町なみとして京都市の歴史的界わい景観地区としてしたしまれている。

いま、京都では構造技術の変化と革新、規模の巨大化と高層化のなかで、伝統的な木の文化のなかでつちかわれてきた町なみが深刻な試練にたたさされている。そのなかで、最近、注目すべき事象があらわれた。京都の中心部、四条烏丸に近い杉本家住宅の市文化財指定である。ほとんど絶望視されていたこの町家の指定のもつ意義は大きい。杉本家住宅は明治初年に建てられた町家として注目されるばかりでなく、祇園祭には伯牙山ちよういえの町家としても大きい役割りを果たしている。変貌する都市空間のなかで、杉本家住宅を伝統的町家の構成を示す不動の点として保存し、これと共鳴し、ひびきあう都市空間の創造の上に大きさ役割りを果たすにちがいないし、そのための知恵と工夫に努めなければならない。今まで「点保存」から「面保存」へと拡大してきた町なみの保存をすすめてきた。急激な町なみの変貌のなかで、このわずかにのこされた伝統的住居を核として、新たな伝統的な

町なみ形成と創造への努力をつくさなければならない。

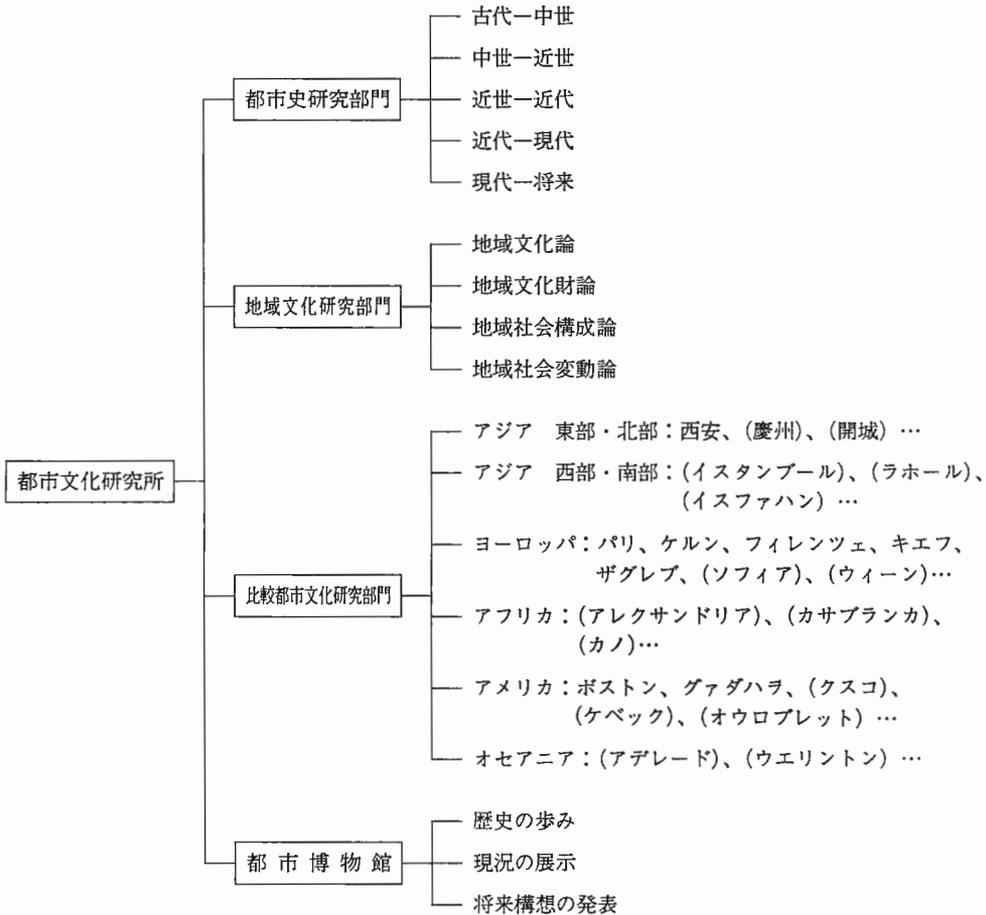
こうして、京都ではその地域の伝統にふまえ、地域の個性をたかめるために地域文化財の活用をむけて各地で、努力がつけられている。京都は建都1200年を目前にして、その将来像を明確にえがきだす必要にせまられている。まず、京都市全域について、北部では歴史的環境をいかした保存的開発地区、南部を積極的な実験の開発地区として位置づけ、その相互の交流によって新しい時代への適応の方途をめざさなければならない。そのため、建都1200年、21世紀を記念して新都心を南部に形成し、その中心に羅城門を復元しモニュメントとし、都市文化研究所を設け、世界歴史都市会議の事務局として機能させるのも一案といえよう(表-3)。また、京都がつちかってきた伝統文化、伝統的生業の更新と創造に努めなくてはならない。その一案として「木の文化研究センター」を提示したい。

3. 木の文化研究センター構想 ——木の文化の再評価——

木の文化のなかに生き、木の技術をそだててきた日本人は、多様な木造建築の技術をうみだしてきた。社寺・城郭・数寄屋・武家・町家・農家など、それぞれ建造物の類型にしたがい、しかも地域的特性をもつ設計の手法、建築の技法を、ながい年月をかけてつちかってきたのである。それは日本人の多彩な建築意匠、多様な建築技法の創造と開発を示し、そこに日本人のすぐれた知恵と努力とがこめられていることを忘れてはならない。

ところで、木の文化、木造建築の技術への人びとの関心はどうか。あらゆる伝統文化や伝統技術は、近代化の歩みのなかで、軽視され厄介視される傾向がつよかった。木造建築も例外ではなかった。戦後の技術革新と高度成長のなかで、大学の建築学教室の講義科目から木構造は姿を消した。木造建築を現代建

表一3 都市文化研究所構想



築の流れとは無関係とみなす傾向がつよかった。なぜ、木造建築は現代性を失ったのだろうか。耐久性・耐火性にかけていることが指摘された。この点について、かんがえてみよう。

近世都市・城下町建設の理念をみると、戦国の武将たちは城下町を保護し、その経済力を吸収しようとしたが、戦闘にさいして放火し、自ら火を放って自焼する町としかかんがえていなかった。このかんがえ方は、近世の城下町建設に反映した。享保年間の『武道初心集』をみても、「爰に臨みては悉く自焼致して取払ふ義なれば末を兼たる家作としては仕

まつるべくようこれなく」といい、戦国乱世の「根小屋普請」でかまわない、と記している。城下町を臨戦的城下とみなし、恒久的な不燃性の都市をめざしてはいなかった。城下町の都市生活はきわめて不安定であった。

都市生活がひらけていくなかで、近世の町を不燃性の都市に改造しようという動きがあらわれてきた。たとえば大坂の両替商升屋の番頭山片蟠桃は、都市に十字の防火林の設置を提言し、豊後日出藩の帆足万里は、「西洋の法」にならって「石または磚瓦」構造の3・4階をすすめて、空地を防火除地とするように、また京都上賀茂の出である梅辻規清は、

校倉造を漆喰^{しっくい}で塗装した防火構造「横木組立蔵造」とその連結による防火建築帯の設置を提唱している。幕末の開明的な洋学者本多利明は「屋根瓦を鑄鉄瓦に」「紙障子を厚板ガラスに」改造することをすすめ、「日本家作に出生する子は、草木にあやかりてか必ず智慧脆く浅薄なり、石家作に出生する子は金石にあやかりてか必ず知慧賢く達才なり」といっている。

木造建築の消極的側面のみが強調され、近世都市への批判と改造への志向は失われ、西欧への傾斜をつよくしたのである。

近代化と木造技術

明治になって、近代化の動きはいっそう強くなった。西欧の技術をそのままとり入れ、建築教育がはじめられた。もちろん、西洋の建築様式とならんで伝統的建築についての日本建築史の講義は用意された。しかし、西洋の建築様式は官庁や銀行などの建築で実用されることもあったが、日本建築史は古建築の保存修理という特別な分野でしかいかされず、これを近代の建築のなかに位置づけ、西欧の建築技術と交流させ格闘させようとする努力は少なかった。いっぽう庶民の住居は町大工の手でうけつがれてきた。

近代の建築教育は、柳田国男のいう「非凡の教育」と「平凡の教育」にまったく分離してすすめられた。西欧の書物から学ぶ「正

統」な建築学と、町大工や村大工によって親方から弟子へうけつがれる技術とに分かれ、相互に交流することは少なかった。戦後になると、「大量生産・大量消費」の工業化の波は住宅にまで及び、画一化の傾向がつよまった。大工のときすまされた技術をうけつぎ、その技能を熟成させようとする努力をいとうようになり、木造技術の伝統は危機にさらされているのである。

木の文化研究センター構想

木造建築の技術がおかれている現況を自覚し、積極的な対策を構じなければならない時に来ているようだ。

木の文化の伝統は、大工技術にとどまらない。瓦・左官・塗装・畳・建具・表具など、関連した技術のどの一つを欠いても、木造技術を保存したことはならない。その体系的保存を心がけなければならない。

木の文化の再生をめざし、その伝統技術の再評価と、継承・発展をはかるための木の文化研究センター構想を提言したい。

この研究センターは研究部門・研修部門・伝統建材バンクの三部門からなる。研究部門では、比較住居論を通じて、風土に根ざした住居への確固とした基礎をつくり、アジア各地の技術者との交流をはかる。同時に、現代的観点から、閉鎖的になりがちな木造の伝統技術の体系化をはかり、現代の建築技術との

表一4 木の文化研究センター構想



交流、風土環境にふさわしい建築の創造をめざす。

研修部門では、木の技術に関心をもつ人びとのために、その技術の研修をはかる。建築科の学生には、日本の伝統である木造建築を身をもって体験せしめ、各大学での学習と連携させて新しい建築学の創造に寄与する。市民の研修は重大である。余暇時間の増大とともに木の文化、木の技術への関心はたかまっている。そこで「日曜大工から数寄屋大工まで」をモットーに、多様な木造技術の研修の場を用意する。また、現在活躍中の大工や建築家にも、再研修の機会を用意し、技術の深化をはかる。木造文化財保存国際研究集会に於ても、また現在日本の技術者が協力してすすめているモンゴルのラマ寺院、アマルバヤスガランの修復計画でも、日本の木造技術への関心、研修の希望がよかった。アジアの木造建築技術者の研修と交流の場ともしたい。

最後に、伝統建材バンクは、現在数多くの木造建造物が新しく改築される際、その伝統的建材が廃材として処理し放棄され、問題をひきおこしている場合が多い。かつて建材はくり返し再利用され、新しい建造物のなかに再生されてきた。このことは、伝統的建築の解体修理のさいの調査で明らかにされている。そこで、貴重な伝統建材(瓦・柱・梁・壁土・建具など)を登録し、保存して、適宜再活用をはかることにしたい。木の文化をいかした新しい町づくりへの積極的参加が期待されているのである。

4. 地域文化財がはたす積極的意義

最近では都市計画という言葉にかわって、「町づくり」という言葉がよくきかれる。従来の欧米の都市計画の手法をそのままとりいれた都市計画では、かつて、人びとが「わが町」「わが村」としたしんできた町や村がどこか遠いところへととはなれていく不安かられる傾向がよかった。これにたいして、そ

れぞれの地域の自然や伝統と共存する手づくりの「町づくり」を求めているからであろう。そこで、いま一度「地域文化財」をいかした歴史の年輪をきざみこむ町づくりが望まれているのである。

最後に、地域文化財の効用とその積極的意義について考えておきたい。それは地域の個性を強調することであり、地域の人びとを結びつけ、誇りと連帯感を確保できる点にある。また、地域文化財を保存し新たに創出していく過程で、いま失われつつある地域における世代間の交流を活発化することができる。岸和田の「だんじり祭り」を見てもわかるように、準備から祭りの日まで、そこには「老」「壮」「成」「青」「幼」「少」の五結合、六結合がみられるのである。また、いまほど人口流動が激しい時代はなかった。もとの住民、原・住民と新しく移ってきた新・住民との交流は重要である。たとえば、各地の町や村で地方史の研究、市史・町史の編纂が多く地域ですすめられている。市史編さんの関係者に聞くと、当初土着の人しか関心を持たないのではないかと予想していたのにならぬ、新住民の関心が高かったのにおどろいたという。新・住民がその土地への帰属意識を求めて市史につよに関心を示しているのだといえよう。地域文化財をいかした新しい町づくりをすすめれば、他の町の人もその新しい町づくりに関心をいだき、訪れてくる。そこに地域をこえた交流がうまれ、新しい観光にもつながるといえよう。

先にふれた「ガンダーラ地域博物館」構想も、こうした観点、かんがえ方の延長にあるといえよう。今まで受信能力が高いといわれてきた日本であるが、ガンダーラは東西から文化を受信して独自のガンダーラ文化をうみだした。やがて、ガンダーラはその独自のガンダーラ文化をもって東西の各地に大きい影響をもたらす発信基地の役割をはたすことになった。この歴史的経験を学ぶ必要があるだ

ろう。従来、日本は海外の先進文化を積極的
にとりいれ、伝統文化と交流させて新しい文
化をうみだすことに努め、抜群の受信能力を
示してきた。そして、今、世界の各地からさ
まざまな協力を通じての発信機能をつよく期
待されている。ガンダーラが歴史にはたして
きた役割りと経験に学び、私たちは世界の文
化に貢献しなければならないのではないか。
地域文化財を保存し新しい地域文化財をうみ

だし、新しい町づくりをすすめることによっ
て、外の世界の人が関心を持つ新たな情報の
発信地になることができるはずだとかんがえ
ている。

本研究の一部は、平成元年度文部省科学研究費
補助金総合研究(A)(研究代表者：中岡哲郎，課
題番号01102030)に負っている。